

〔寄稿〕

ささやかな軌跡 ～心理臨床の世界に生きて～

札幌学院大学大学院臨床心理学研究科 滝沢 広 忠

はじめに

札幌学院大学に32年半勤め、定年まであと6年残して退職することにした。私の人生の大半をここで過ごしたことになり、振り返ってみればさまざまな思いが胸に浮かんでくる。人生を回顧するにはまだ早過ぎるが、原稿を依頼されたこの機会に、心理臨床家としての私のささやかな歩みを記しておきたいと思う。いかに生きるかということに苦悩していた人間が、いつしか北海道の心理臨床の世界にどっぷり浸かっていたというのが実感である。考えてみれば東京生まれの東京育ちで北海道に縁もゆかりもなかったが、私は随分人間関係に恵まれていたと思っている。

学生時代まで

私は子どもの頃から昆虫採集が好きだった。近くの高尾山や平山城址公園にはよく補虫網をもって出かけたものである。小学生のときは理科が得意で、湯川秀樹にあこがれていた。高校は理科系のクラスであり、大学も最初は物理学科を受験している。しかし高校時代テニスに明け暮れていたため受験に失敗し、浪人生活を余儀なくされた。この頃からさまざまな書物を読むようになり、自分の内面に関心が向くようになっていく。カレン・ホルネイの『自己分析』を読んだのもこの頃である。そこで大学では心理学を学ぼうと決心した。早稲田や慶応にあこがれ、受験はしたものの落ちてしまい、日大の文理学部心理学科に進学することになった。1969年のことである。この年はまさに大学紛争で荒れていた時期で、東大の入試が中止となった年でもある。日大文理学部は世田谷の桜上水にあったが、校舎はバリケードで封鎖されており、構内に入ることは出来なかった。われわれ1年生は武蔵野台にあるプレハブの仮設校舎で1年間過ごすことになる。サークルは心理学

研究会（顧問は大村政男先生）に所属していた。大学の校舎に入れなかったため、研究会は都立松沢病院近くの会館を利用していた。先輩は東大・日大闘争にかかわって留置場に入れられた経験者が多く、眩しく見えた。体制を批判するのは若者の特権であるが、私自身は学生運動に加わらなかった。

その頃の心理学者といえば、一橋大学の南博、東京工業大学の宮城音弥が有名であった。宮城音弥は岩波新書から何冊も心理学関係の書物を出しており、夢中になって読んだ記憶がある。またクレッチメル『体格と性格』を訳した早稲田大学の相場均の本もよく読んだ。ヤスベルスの『精神病理学総論』や、みすず書房から出版されていた『異常心理学講座』にも興味はあったが、当時の私にはむずかし過ぎて、どこまで理解できたか心許ない。それでもそこに名を連ねていた島崎敏樹、霜山徳爾といった碩学には人間的な魅力を感じ、その後彼らの本を好んで読むようになった。

当時大学では臨床心理学はマイナーな科目で、実験心理学が主流であった。知覚や感覚の機械実験があり、脳波実験も行った（私自身は逃げて一度も被験者になったことはない）。またラットを解剖したこともある。このようなことを学んで、果たして人間の心が分かるのだろうかと思いついた。そんなことから学生時代はもっぱら小説や好きな本を読んで過ごしていた。卒業論文は『ドストエフスキーの心理』という病跡学である。指導の児玉齊二先生が芸術に造詣の深い人で、自由に書かせてくれた。細木照敏先生が日大に着任したのは私が卒業した後であるが、大学院の友人から、細木先生が私の卒論を評価していたという話を聞き、先生に親しみを覚えた。後の話になるが、細木先生には国内研修で東京に滞在していたとき、聖路加国際病院の土居健郎先生を紹介してい

ただいたり、私の事例研究に好意的なコメントを書いて下さるなど、随分お世話になった。

知的障害児施設に勤めて

私は企業に勤めてサラリーマン生活を送るようなことは出来ないと考えていたので就職活動はしなかった。しかし何となく医療機関に勤めたいという気持ちは持っていた。たまたま歯科医師だった叔母の夫がある精神科病院を紹介してくれた。心理職を募集していたわけではないので採用されることはなかったが、そこで対応してくれた心理士との出会いは深く印象に残っている。まったく何も知らない私に対しても誠実に接してくれたのである。その人が日本臨床心理学会（日本心理臨床学会ではない）の中心的人物であることは、後に知った。

卒業間際に恩師である関忠文先生と花沢成一先生に連れられて新宿の京王プラザホテルに行った。そこで社会福祉法人侑愛会の理事長である大場茂俊先生と会うことになる。別に面接試験を受けたわけではないが、しばらくしてから北海道に来ないかという話になり、知的障害児施設であるおしま学園に勤めることが決まった。道南の渡島当別にあるこの施設に行く気になった理由のひとつに、トラビスト修道院が近くにあって、ということがあげられる。「人生逃亡者の記録」の著者であるきだみのる（本名山田吉彦。ファープルの「昆虫記」の訳者）が若い頃トラビスト修道院に滞在していたことを本で読んで知っており、興味があったからである。

おしま学園には1年間児童指導員として働いた。軽度知的障害児の居室を担当していたが、子どもたちが昼間学校（併設されていた分校）に行っている間は、重度の障害児の指導に携わっていた。ここは子どもたちの生活の場であり、年間を通してさまざまな行事が行われていた。生活指導が中心で専門性を生かせない物足りなさのようなものを感じた。生意気にもそのことで理事長と議論したこともあった。

ここで知的障害児の素直な気持ちに触れることができた体験は新鮮であったし、献身的な職員とじかに接することで、福祉についていろいろ考え

させられた。

札幌医科大学心理学教室の思い出

現場に勤めることで改めて勉強の必要性を感じていた。たまたま帯広の精神科病院を訪問したとき、札幌医大の心理学教室のことを教えられ、研究生になることにした。日大の大村先生が札幌医大の杉山善朗先生と親しかったためか、快く受け入れてくれた。そしてアルバイトとして市立札幌病院（静療院）、北大保健管理センターの非常勤の仕事を紹介してくれた。1年間、心理検査の勉強をしながら心理アセスメントのレポートを書く毎日であった。

その当時の心理学教室は、杉山善朗教授、竹川忠男助教授、それに大坊郁夫さん（現在大阪大学教授）、澤田幸展さん（現在札幌医科大学教授）が助手を務めていた。私は大坊さんの部屋に机をおかせてもらった。今北星学園大学に勤めている今川民雄さんがときどき部屋に遊びに来て大坊さんと議論していたのを思い出す。

私の名前が最初に専門誌に載ったのは、第46回北海道精神神経学会で発表された共同研究においてである。心理検査の課題で不快なものがあると、突然意識喪失発作を起こしてしまう症例報告であった。脳波を測定しているとき心理検査をしてほしいと再度医師に頼まれたが、本人が拒否したためそれは実施しなかった。この出来事は、倫理問題を考えるきっかけとなった。市立札幌病院で軽度知的障害の子どもに知能検査を実施したとき、昼休み廊下で会ったこの子の母親からIQを低く評価して欲しいといわれて驚いたこともある。障害児手当の問題がからんでいたのである。心理士はただ医師の指示に従って仕事をすればよいということではなく、心の専門家としての自覚が必要であると思った。

医大では性染色体異常であるクラインフェルター症候群の患者にTATを実施したことがある。性に関する歪んだ反応が顕著に見られたので驚いた。また、心理検査の実習の授業で、ロールシャッハ・テストの相手がいないということから、私が借り出されたことがあった。まだ学生運動が盛んな頃で、その学生の委員長と組んでロー

ルシャッハ・テストを実施した。医学生であるから「トルコ鞍」といった解剖用語が出てくるのはわかるが、王冠など権威的な反応が多かったことが印象に残っている。投映法は無意識の世界を映し出しているということを如実に示したエピソードである。

市立函館保健所時代

1年後、杉山先生から函館保健所に心理の欠員が出たので行かないかという話があった。最初それほど気が進まなかったが、五稜郭病院小児科の本村捨夫先生と会い、保健所に勤めようという決心を固めた。本村先生は私の人生の恩人であり、後にいろいろお世話になっている。

保健所では精神衛生相談員ということで、主に三歳児検診で子どもの精神発達面をチェックする仕事を担当していた。そこでは発達の遅れが疑われる子どもをプレイルームで観察しながら経過を見ていた。当時は小児自閉症が注目されていた時期である。その疑いのある子どもを何人も見ているが、その頃自閉症児の治療機関はほとんどなく、保育園・幼稚園でも引き受けてもらえず、保護者は途方に暮れていた。そこで土曜日の午後、ボランティアを募って、自分たちで治療教育を始めることにした。幸い近くにある教育大付属養護学校の体育館を借りることが出来た。養護学校の教諭であった佐藤義昭さん（現在北翔大学教授）がスタッフとして協力してくれた。それに教育大や看護学校の学生がボランティアとして参加してくれた。

その後函館YWCAで障害児を含めた幼児グループを始めることになり、私が保健所で経過観察していた子どもたちもそちらで指導を受けることになった。函館YWCAは以前、自閉的傾向のある子どもだけを集めてのびろ会という治療保育を実践しており、その基盤はあった。その中心的存在であった伊藤眞智子さんが幼児グループにも参加してくれた。そしてねむの木会という専門家集団がグループを支えることになる。そのメンバーは本村捨夫、松本征八、佐藤義昭、伊藤勝志、木村健一郎の諸先生であった。私もこの末席を汚していたが、この頃がわが人生の最も楽しい、そ

して充実した日々であったと思う。しかし子どもたちのために出来たことは少なく、悔いは残っている。

保健所では毎週精神衛生相談日を設け、非常勤として市内の精神科医や大学教授に来てもらっていた。そこに陪席できた経験はとてもいい勉強になった。北海道教育大の近藤元先生もその一人であったが、本当に教育者らしい教育者であった。先生は私が札幌学院大学に勤めることが決まった時、餞別を下さった。そこには「よろこびつつ、大成を祈りつつ」と記されていた。先生の心遣いが感じられて嬉しかった。

函館では函館カウンセリング同好会に所属し、カウンセリングの勉強をしていた。当時はまだロジャーズの非指示的療法という言葉が使われていた時代である。例会の会場が保健所であったため、熱心に参加した。精神科医、小児科医、少年鑑別所や児童相談所の職員、学校の教員などがメンバーであった。地方都市だからこそさまざまな職種の人が集まったのだろうが、彼らとの交流は仕事上でも連携をとりやすくし、大切なネットワークとなった。エンカウンター・グループの話はここで知ることになる。当時函館少年鑑別所の所長であった篠田勝郎先生にも1、2回お会いしている。彼がアンジューの『分析的心理劇』の訳者であったことは、後で知った。

札幌学院大学に着任

29歳の時、札幌商科大学（札幌学院大学の前身）人文学部人間科学科の臨床心理学担当の講師として迎えられることになる。私も若かったので学生たちと一緒にさまざまな経験をした。本学勤務中で一番の思い出は、他大学との合同インターゼミ合宿であろう。早坂泰次郎先生のお弟子さんの先生が勤務する大学（長野大学、淑徳大学、東京国際大学、武蔵野大学など）の学生たちと合同で二泊三日の合宿を数年間続けて行っている。これは学生にかなりインパクトを与えた体験だったのでないかと思っている。

ゼミの学生と一緒に芝居を上演したこともある。私が『風とゆききし雲からエネルギーをとれ』というシナリオを書き、北海道女子短大（現在の

北翔大学)の鳥貫真寿美先生に衣装のデザインを考案してもらい、札幌高専(現在の市立札幌大学)の布上恭子先生に振付をお願いした。芝居のために合宿を行うなど結構本格的に稽古をした。学生も情熱的に取り組んだ。これも楽しい思い出として残っている。なおこの仲間から二組のカップルが生まれている。

その他、深夜車に分乗して夕張のお化け屋敷(廃坑後のアパート)まで行ったり、ゼミ合宿と称して乙部で陶芸を体験したり、侑愛会の施設見学の後、函館の夜景を見に行ったり、自宅の庭でジギスカン・パーティーをしたり、学生との懐かしい思い出は尽きない。しかしここでそれを語るには紙幅が足りない。以下研究にかかわる取り組みを紹介したい。

集中的グループ経験

大学院でグループ・アプローチ特論を担当するようになった背景には、以下のようなグループ体験があった。集中的グループ経験とは、人間の心理的成長、および対人関係におけるコミュニケーションの改善をめざして行われる宿泊形式のグループ・アプローチのことである。私が初めてこの種のグループに参加したのは、1976年の北海道カウンセリング研究会ワークショップであった。以降、エンカウンター・グループ(1978)、非言語的感受性技法を中心とするエンカウンター・グループ(1979)、清里プログラム'80ファシリテーター・カウンセラー相互啓発セミナー(1980)、ラ・ホイヤ・プログラム(1981)、グループ・ダイナミックス・セミナー(1982)、とさまざまな立場のグループに参加している。当初自分の感情を率直に表明する人に出会って強烈な印象を受けたことを覚えている。表面的なかかわりではない、生の人間同士のぶつかり合いは新鮮であった。しかし、自分の内面を見つめるにはよい機会であったが、毎回何か満たされない気持ちもあってもやや感が熾り続けていた。それぞれのグループによって体験の意味が異なっている印象を受けたが、主宰者たちは相互の立場を理解していないように思われ、どこかグループに疑問を感じていた。そんな折、早坂泰次郎の「よい人間関係」と「本

当の人間関係」という言葉に出会い、「本当の人間関係」とはどのようなものか体験してみたいと思った。それがIPR(Interspersonal Relationship)トレーニング(1983)との出会いである。私はIPRに参加することでグループに対する違和感から解放された。

エンカウンター・グループとIPRはどのように違うのだろうか。エンカウンター・グループは、メンバーが自己防衛的な態度から解き離れ、自己開示へと向かうプロセスをたどっていくようである。そして自分の気持ちを率直に話し、それがメンバーに受容される体験を通して心の安らぎを得る。しかし、メンバー同士共感し、親近感を抱くようにはなるが、ややもするとナルシズム的でグループに依存し、真の意味でお互い同士信頼しあうという体験まで至らないような印象を受けた。癒しを求めて参加する人が多いという感じである。それに対してIPRは「人間関係の存在意義をお互いに問いかけあう場」であった。自分は今まで本当に相手とかわらうとしていたのかと自問するようになり、自分が他者との関係のなかでどのようなかわりをしているか、そのあり方に気づかされるような体験である。そして最終的には個々のメンバーの違いを明確にし、お互いの違いを認め合うという体験のように思えた。それは主体的に自分を引き受けて生きてゆこうという勇気を与えてくれるものであった。これは心の癒しというより、自分の生きかたを見つめるような体験で、まさに「実存の覚醒」といってもよい。

いずれにしても、グループ体験は自分の内面的な心の動きを見つめるよい機会であったと思う。自己理解や対人関係のあり方を学ぶためにはふさわしい体験学習であり、心理臨床家の感受性訓練として意義あることだと思っている。

IPRを通して早坂泰次郎という人間に関心を抱くようになり、その方法論を学びたいという気持ちが徐々に強くなっていった。そして、国内研修の機会を利用して1年間立教大学に行き、彼のもとで勉強することになる。現象学との出会いである。

方法論としての「現象学」

心理臨床に取り組む場合、やはり理論的背景となる方法論が必要ではないかと思っている。私の場合それが現象学であった。若い頃から荻野恒一、木村敏、メルロ＝ポンティなど現象学派、人間学派と呼ばれている人たちの本を好んで読んできた。鯨岡峻や津守真の考えにも興味をもった。現象学に関する専門書はむずかしく、誤解や読み損ないもあったかと思われるが、最終的にはヴァン・デン・ベルクや早坂泰次郎の提唱している現象学的方法論に魅力を感じ、それを実践のなかに取り入れようとしてきた。学生時代に読んで感動した早坂泰次郎の「人間存在の心理学」との再会でもあった。

早坂先生が強調しているのは、よく見るということ、そして真剣にかかわる、ということである。その理論が現象学であった。現象学は、生きている世界をあるがままに捉えようとする。それは自然科学的な意味での客観ということではなく、そこで起こっている現象を事実としてそのまま捉えるという視点である。主体客体と区別する以前の「生きられた世界」をじっくりと観察し、生のアクチュアリティを感じ取りながらその現象を記述する（リアリティを捉える）。そしてそこから意味が浮かび上がってくるのを待つのである。そのような発見を志向している。これは現象を全体の中で捉えることでもある。ゲシュタルト心理学の「図」と「地」の考えとも共通している。木を見るときも、われわれは必ず生えている木を見ているのである。そこに背景があるからこそその一本の木が意味ある存在として浮かび上がってくる（「描かれるいかなる人も、物も、それを包む空間もすべて等価値の実体だ」という野田弘志のリアリズム絵画の考え方も同じだと思った。）。

また現象学では、あらゆることは関係の中で起こると考える。心理臨床場面でいえば、クライアントは治療者の存在によって自分の考えを生み出していく。つまり治療者が何に関心を示すか、そのまなざしで治療の方向が決まっていくといってもよい。このように考えると治療者の態度が重要な意味を持つてくる。先入観を排してあるがままの世界にかかわること、そして自分の身体感覚を

通して相手を見ていくという姿勢が大事であろう。そうすることで相手の生き生き感（vitality affect）が実感として伝わってくるのではなからうか。このような関係の世界にどれだけコミット（自己投入）できるかが心理臨床家には問われている。私はこのような態度で臨床に取り組みたいと常に心がけてきたつもりである。

こころとからだ

エンカウンター・グループで知り合った葛西俊治さんと話していて、意外と共通した体験をしていることがわかった。そこで1984年にグループ・アプローチ研究会を立ち上げ、グループ体験について話し合いの場を設けることにした。その頃、伊東博のニューカウンセリングも注目されるようになり、臨床領域でもこころとからだの問題に関心が向けられつつあった。私は1985年5月に、初めて竹内敏晴さんのことばとからだのレッスンを受けている。ここでからだを劈くことがこころも開放するという実感を持つことができた。その体験を深めたいということで、6月から葛西さんと「札幌こころとからだの会」（通称「ここから」）を立ち上げ、からだを通して自分のこころを探る体験をしていくようになる。翌年は竹内さんを白老アカデミーハウスに招いてワークショップも開催している。

保健所で三歳児検診を行っていたとき、言語指導の参考文献として竹内敏晴さんの代表的著書である「ことばが劈かれるとき」は読んでいた。当時は耳がよくない竹内さんに共感し、からだのことはそれほど意識していなかった。しかし実際にレッスンを受けることで、からだところは不可分なものであることを実感するようになる。心理臨床活動を行う上でも重要な問題ではないかと思い、以後たびたび竹内さんのレッスンを受けている（国内研修で東京に滞在していたときも、原口芳明さん（愛知教育大学）、西河正行さん（大妻女子大学）と一緒に、半年間、新宿の朝日カルチャーセンターで竹内さんのレッスンを受けていた。）。

竹内敏晴レッスンは人間の可能性を劈くことをめざしている。それは「他者に働きかけ、相手を

変え、自分もかえられていくという意味での人間関係のダイナミズムから生み出される創造性」の実践である。レッスンは「やすく」「ふれる」「まっすぐに向き合う」という3つのことばに集約される。自分が本当に感じたことを立脚点としながら生きていくよりしかたがない、という状況におかれる。「真実は存在するのではなく、発見されるものである。」心理臨床家が自分の身体感覚に気づいたり相手に対するかかわり方を見つめるには、竹内レッスンはとても意義ある体験だと思っている。

2001年に札幌学院大学で日本人間性心理学会を開催したときも、こころとからだの問題を考えたいと思い、成瀬悟策（臨床動作法）、池見陽（フォーカシング）、増野肇（サイコドラマ）とともに竹内さんにも加わってもらい、「からだことばへの気づき」というワークショップを開催した。なおこの学会では、公開講演会を臨床哲学の鷺田清一先生（大阪大学総長）をお願いし、「弱さの力〜ケアのなかで起こること」というテーマで話してもらうなど、かなり私の関心ある内容を盛り込んだ大会であった。

精神療法懇話会で活動していた頃

精神分析医である松井紀和先生のグループ・ダイナミックス・セミナーは、グループ体験としてインパクトのあるものであった。私が池田光幸さんと近くなったのは、このグループで一緒にからである。このグループの参加メンバーが中心となって事例検討会を始めようということになり、札幌近郊の心理臨床家に声をかけて1983年に精神療法懇話会が発足した。当時札幌近郊で事例検討会を行っているところはほとんどなく、心理療法に関心をもっていた若手の精神科医や心理士が結構集まった。事例検討会は毎月1回の例会の他に、年に1度著名人を呼んで公開スーパーヴィジョンを行っていた。私が会長だった時、中井久夫先生にも来ていただきたいと思って手紙を出したことがある。残念ながら来ていただけなかったが、丁寧なお断わりの返事をいただいている。

精神療法懇話会の存在が、北海道の臨床心理士会をスムーズに発展させたひとつの要因になって

いたのではないかと考えている。北海道臨床心理士会でもいろいろ研修会を行うようになるが、私はこれらの活動をとおして意外と多くの著名人と出会っている。なぜなら、先生方が北海道に来るとき、たいてい私が千歳空港まで迎えに行くことになったからである。河合隼雄、神田橋條治、佐治守夫、村上英治、山中康裕、前田重治などの諸先生は、皆私のブルーバードに乗っている。そこで先生方の普段の人柄を身近に感じることができた。例えば、佐治守夫先生を千歳空港まで送って行ったとき、こちらは車を運転して帰らなければならぬのにビールを飲まされ、あわてたこともあった。河合隼雄先生の場合は、永田法子さん（中京大学教授）と一緒に空港まで迎えに行ったが、時間があつたので、支笏湖回りで札幌に行くことにした。いつも冗談ばかりいっている先生であるが、意外と繊細な気遣いをするのがわかった。前田重治先生は辻邦生のファンであり、以前から親しみを感じていた。札幌に来られた時、安岡啓先生の奥さんである蓉子夫人と3人で札幌芸術の森美術館まで行ったことがある。そんな折、辻邦生の「春の戴冠」を読んでイタリアに行ってみたくなったという話をしてくれた。山中康裕先生は千歳から札幌までの高速道路に植えてある樹木の種類をしっかりと観察し、何種類あったか教えてくれた。神田橋先生は奥さん同伴で来られたが、わざわざ鹿児島のお土産まで用意して下さったのは恐縮した、等々。今は亡き人もいるが、このような著名人のさりげない日常の素顔に接することができたことは、貴重な体験であった。

サイコドラマ（心理劇）

私にとって現象学の実践の場がサイコドラマであった。早坂泰次郎や竹内敏晴のもとで体験したことを心理臨床のなかでどう生かすか、ということでサイコドラマの世界に興味をもつようになった。わが国のサイコドラマには大きく4つの流れがあり、それぞれ独自に発展していったところがある。私はそれぞれの流れを実際に体験しながら心理劇を学んだ。まず日本臨床心理劇協会主催の研修会で、増野肇、台利夫、磯田雄二郎、高良聖の各グループに参加した。この集まりには人間的

な魅力をもつ人が多くいたが、心理劇そのものは何か嘘っぽいとか操作的な感じがし、しかも人間関係が表面的な気がして初めはなじめなかった。それで他のグループにも参加してみようという気になったのである。お茶の水女子大の松村康平は、自己・人・物という独自の関係学を提唱して心理劇を行っていたが、理論と実践が結びついていないのではないかと疑問に思った。外林大作のロールプレイングも形式的なロールの学習という感じで心に響くものはなかった。迎孝久らの九州グループは補助自我の訓練というニュアンスが強く、主役中心のドラマではなかった。そんな体験から、何となく親しみやすい雰囲気を感じていた臨床心理劇協会のメンバーとのかかわりを強めていく。ザカ・モレノの研修会には2回参加している。主役中心の深い体験であった。ザカの力量はさすがだと思った。

主役中心の心理劇は、相互研修として深い体験ができて、臨床場面ではそのまま使えないという印象を受けた。その一方で、臨床心理劇協会が体験した内容は、統合失調症患者のように自我が脆弱な人には安心して取り組めるように思えた。そこで当時札幌佐藤病院に勤めていた青柳信子さん木野口郁子さんたちと一緒に病院で心理劇を実践することにした。その後札幌香雪病院でも菊谷欣広さんと一緒に心理劇を行っている。それと同時に1986年に札幌サイコドラマ研究会を立ち上げ、病院臨床に携わっている人を中心とした相互研修を行ってきた。

2000年に札幌学院大学で日本心理劇学会を開催したが、その前日のプレカンファレンス・ワークショップには、オーストラリア、ニュージーランド・サイコドラマ・アソシエーション（ANZPA）のマックス・クレイトン、スー・ダニエル、そしてアメリカからプレイバックシアターの創始者であるジョナサン・フォックスを招聘するなど、画期的な学会であった。この大会で北海道をアピールできたのではないかと自負している。

心理劇はアクションを伴うので抵抗を感じる人が多い。しかしコルシーニが「サイコドラマは、すべての心理療法家が身につけておくべき素養であり、他のいかなる心理療法システムをも補完す

るものである。」と述べているように、心理臨床を学ぶ人にとって、患者体験にもなるもので、一度は経験しておくべきものではないかと私は思っている。

聴覚障害者の心理臨床

私は3歳の頃中耳炎を患い、以降何度か手術を受けている。そんなことから耳があまりよくないことに劣等感を抱いていた。このことが、聴覚障害者の心理臨床に関心を向けさせた。たまたま図書館で琵琶湖病院の藤田保先生たちが発表した「聴覚障害者の精神保健」という論文を見つけたときは、衝撃的であった。寡聞にしてこのような研究分野があることを知らなかった。そこで早速藤田先生に手紙を出し、聴覚障害者精神保健研究会に参加することにした。そこで河崎佳子さん（神戸大学教授）と出会ったことが、私の研究生活における大きな転機となった。

難聴・中途失聴者の心の悩みはどんなものか、精神科で治療を受けている聴覚障害者はいるのだろうか、という素朴な疑問から調査研究を始めた。このような簡単なことでも先行研究がほとんどない領域なのである。やがて多くの聴覚障害者と知り合いになるが、そもそも「聴覚障害者」の定義そのものがあいまいであることも分かってくる。単にろう者、難聴者、中途失聴者に分けることはできず、アイデンティティの拠り所が何なのか、ということがその人の人生にとって重要であることが分かってくる。聴覚障害者を対象とした場合、コミュニケーションを取るのがむずかしく、研究や心理臨床活動は容易ではない。そのため心理臨床家も何となく敬遠し勝ちである。しかし村瀬嘉代子先生が後に紹介する本の中で述べているように、聴覚障害の心理臨床は「何よりも、実は心理臨床の本質そのものがすぐれて問われている」のである。

河崎さんたちと一緒に日本心理臨床学会で10年間「聴覚障害者の心理臨床を考える」という自主シンポジウムを開催し、心理臨床家に対する啓蒙活動を行ってきた。村瀬嘉代子先生はわれわれのシンポジウムにずっと付き合ってくれて、その成果を「聴覚障害者の心理臨床」「聴覚障害者の心

理臨床2」という本にまとめてくれた。

聴覚障害者の研究を始めたことで海外に出る機会も多くなった。4年毎に開催される「世界ろう者会議」でウィーンやブリスベン、マドリードに行くことが出来た。また、「精神保健とろうに関する世界会議」で南アフリカにも行っている。さらに国外研修でアメリカのワシントンDCにあるギャロデット大学に客員研究員として半年間滞在したり、科研費を利用してイギリスに行くことも出来た。これらは世界の動向を知る上で貴重な体験となった。また全日本ろうあ連盟から「聴覚障害者生活支援業務従事者研修会」に招かれ、「私が資源になるために～対人援助技術入門～」というワークショップを担当した。全日本難聴者・中途失聴者団体連合会からは、シンポジウム「聴覚補償リハビリテーションの研究」のパネラーとして呼ばれた。さらに日本補聴器販売店協会から総会の特別講演を依頼され、補聴器販売に携わっている人を対象に「聴覚障害者に対する心のケア」について話す機会が与えられた。このようにわが国のろう者団体、難聴者中途失聴者団体、補聴器販売の社員など聴覚障害者問題にかかわる人との交流も徐々に広まり、心理臨床に関する理解を深めてもらうために少しは貢献できたのではないかと考えている。

アメリカのギャロデット大学にはろう者の研究者が多くいる。日本ももっと当事者が臨床心理学の研究に携われる環境を作る必要があるのではないかと思う。いずれにしても日本ではまだマイナーな研究分野であり、この領域に関心をもつ若い専門家が増えてくれることを期待したい。

おわりに

こうして自分の半生を振り返ってみると、研究しながら生き方を模索してきた自分の姿が見えてくる。札幌学院大学は講座制でなかったこと、大学の運営が民主的であったことから、結構自分の関心に従って自由に研究し、実践することができた。その意味では恵まれた環境であったといえるだろう。

大学では最初人間科学科に所属し、のちに臨床心理学科に移ることになった。私は人間科学科に

魅力を感じていた。学の細分化への反省、専門化が進むにつれ見失われがちな総合的視野を、「人間」を中心にすることで取り戻そうという人間科学科の理念に共感していた。そこで臨床心理学を基礎とした「人間学概論」を担当できたことは、得難い経験であった。したがって臨床心理学を特化させた形で新しい学科を作ることには疑念を抱いていた。しかし当時人文学部長であった中野徹三先生から、そういう考えをもっている人間だからこそ、新設の学科でがんばってほしいと言われ、臨床心理学科に移ることにした。「生きている人間」を理解するためには、「心理」だけではなく、常識と幅広い教養が必要である。「心はもともと詩的なもの」(ヒルマン)とか、「生命あるものを研究するには、生命と関わりあわねばならぬ。」(ヴァイツゼッカー)ということばの意味を、心理臨床に取り組もうとする者は、真剣に考えるべきだと思っている。霜山徳爾が、心理臨床家はスペシャリストではなくゼネラリストたれ、といっているのもそういった意味が含まれていると思う。

また、自戒の意味を込めていうことであるが、心理臨床の世界に携わるとき、自分を相対的に見る視点をもつことも重要だと思っている。具体的にいえば、心理臨床家は自分の影の部分を知っておく必要があるだろう。ゲーゲンヴィルクレイグの「分析家の心のどこかの隅には、患者に対して唯一無二の支配者として出現したがっている化け物がいる」ということばを肝に銘じる必要がある。クライアントひとりひとりの人生の重みを大切にしなければいけない。心理臨床家は黒衣的な存在であり、決して驕ってはいけない。こちらが謙虚に、そして無心にクライアントの話を聴くとき、クライアントは本当の姿を見せてくれるのである。

私はここ数年、臨床心理学という学問に違和感を覚えるようになってきた。臨床心理学は「心」を扱っているが、「魂」は扱っていないのではないか。無意識の世界をいくら掘り下げてもその底にある生命の源、これはからだだと不可分に結びついていると思われるが、そこまで臨床心理学は扱っていない、という思いがあった。ひとりの人

間の生きざまを理解するためには、その「魂」のレベルまで触れる必要があるのではなかろうか。それは宗教とか芸術に近い領域なのかもしれない。私にはまだみえてきていないが、やはり人間を理解するとは、「心」だけではなく、その人の生きている世界全体を見ていく必要があると思う。私の関心は、今後そのような方向に進んで行きそうな気がする。

最初は現場を知らない専門家に対して批判的な気持ちを抱いていたが、いつしか自分も象牙の塔の人間になってしまった。心理臨床家として憧れていた人は何人かいるが、結局自分はその人たちの足元にも及ばないと感じている。振り返ってみれば、私の業績など微々たるものである。とはいえ、こうしてひとりの人間として62歳まで無事生きてこられたことに深く感謝したい。

退職にあたり、最終講義をしてほしいという話がいくつかあった。しかしすべてお断わりしている。大変光栄に思ったが、正直いって私のような浅学非才な人間にはその資格はないように思う。ここに記したささやかな報告で私の足跡をいくらかでも理解していただければそれで十分である。

最後に私の好きなことばを紹介しておきます。

ひとはひと 吾は吾也 ともかくも 吾が行く道
を 吾は行く也 (西田幾多郎)

汝の道を進め 人々をしてその言うに任せよ
(ダンテ)

(注) 人名の敬称は統一されておりません。文章の流れで自由に使わせていただきました。また所属についても煩わしいので省略したところもあります。失礼をお許し下さい。

参考文献

- ゲーゲンヴィルクレイグ, A (樋口和彦, 安溪真一訳) (1981) : 心理療法の光と影—援助専門家の〈力〉 創元社
- 門脇佳吉 (1998) : 魂よ, 目覚めよ—靈感と芸術の創造 岩波書店
- 小林義康, 田尾重良, 平林俊雄, 柏葉武, 滝沢広

忠 (1975) : 躁病期に心因により誘発される精神運動発作を示した1症例, 精神神経学雑誌, 第77巻第3号, 180.

滝沢広忠 (1985) : 集中的グループ経験に関する一考察 札幌学院大学人文学部紀要 第37号, 1-11.

滝沢広忠 (1987) : 竹内敏晴さんのレッスンを受けて 札幌学院評論 第7号, 94-99.

滝沢広忠 (2005) : 心理臨床における方法論 札幌学院大学心理臨床センター紀要 第5号, i.

滝沢広忠 (2006) : 心理臨床の方法論についての一考察 札幌学院大学人文学部紀要 第79号, 21-44.

滝沢広忠 (2008) : 「寄り添う」ということ 札幌学院大学心理臨床センター紀要 第8号, i-iv.

滝沢広忠 (2011) : 関係を生きるということ 集団精神療法 27巻1号